

トレオン攻略

ビヤはアシエンダから巻き上げた土地、支配下に置いた地域の裕福な者から徴収した金品を兵士に分け与えていた。それでも兵士たちは故郷を遠く離れて戦うことを強く拒んだため、革命軍の指導者は兵士たちの妻、恋人など女性の同行を許した。それらの女たちはソルダデラス、あるいはアデリータスと呼ばれた。メキシコ革命には男だけでなく、女も深くかかわっていた。傑出した女性は中流階級の出が多く、政治活動のみならず銃をとって男たちと共に戦った。その大部分を占めた貧しい農婦たちは、非戦闘従軍者として、恋人として、或いは兵士として、男たちに影の如く従った。これは何も目新しいことではなく、古くから行われていた。1836年、アラモの守備隊を全滅させた西のナポレオン、サンタ・アナの軍勢は数千のソルダデラスを連れていた。大勢の女子供は連邦軍の後方にも従っていた。連邦軍ジェネラル・サルバドル・メルカドがチワワからアメリカに亡命を求めたときには将校と兵士3,357人と女性1,256人、554人の子供がいた。連邦軍司令官がこれほどの女性の同行を許した理由は、賄い、食糧の徴発、負傷者の看護など軍の補佐として大きな役割を果たしていたからである。しかし連邦軍が女性同伴を許した本当の理由は、伝統的な徴兵制度に起因していた。兵士は志願や、短期の徴兵ではなく、最も貧しいもの、あるいは為政者側から見て最も好ましくない者を、半ば奴隷のように、強制的に、しかも長期に亘り入隊させた。その結果、脱走する割合は非常に高かった。彼らを軍に止めるための手段が女性の同伴であった。⁹⁰

マデロ革命のときは、戦闘地域は兵士の住む土地の近くで、騎兵が主力であり、比較的短期間に終結したので、非戦闘従軍者は見られなかった。憲政軍の場合は地元を離れ、遠くへ遠征することが多く、様相は一変した。憲政軍は部隊の移動に列車を利用し、非戦闘従軍者も同じ列車に潜り込んだので、輸送費も軽かった。一方ドラドと呼ばれたビヤの正規軍は女性同伴を禁じ、それに代る主計部隊と病院列車が伴った。⁹¹

ビヤ軍の強みは、騎兵、機動力、屈強で戦闘意欲の旺盛な兵士であった。チワワとコアウイラ州は良質の馬を産出し、ビヤ軍の騎兵部隊の強さは、彼等の優れた馬にあった。彼等は物資を運ぶ幌馬車や動物など、移動に邪魔になるものを使用せず、各人が武器弾薬、水筒と毛布のみを携えて戦闘に参加し、食糧など必要なものは全て徴発した。部隊の移動には列車を利用し、十九本の列車と連絡用に使用する短い列車二本を備えていた。⁹²

1914年2月、北部の革命軍は一斉に南へ向かって進軍を開始した。東方のパブロ・ゴンザレスはモンテレーとタンピコへ、西のオブレゴンソノラから南へ向かった。ゴンザレス軍は弱く、動きも鈍かった、オブレゴンは鉄道のない地域を南進せねばならず、何れもウエルタ連邦軍を直ちに脅かすものではなかった。ウエルタにとって当面の脅威はビヤであった。トレオンでビヤを押し返すか、あるいは破ることが出来れば、潮の流れは変わると考えていた。連邦軍の指揮官や政府高官は、トレオンにおける盗賊軍との対決に自信

があった。ウエルタの指揮官たちは、これまでのビヤの勝利をまぐれ当たりとしか見ていなかった。ビヤはフアレス市では奇襲によって、ティエラ・ブランカでは自ら選んだ戦場で政府軍の非正規部隊と戦って勝利したに過ぎない。しかしチワワ市では守備隊を攻め切れず、敗退したのではないかと彼等は考えていた。

今度の状況は違っていた。連邦軍の中でも屈指の司令官レフヒオ・ベラスコがトレオンとその周辺を一万の兵で固めていた。周囲の町には要塞が築かれ、トレオンに隣接する町ゴメス・パラシオは、トレオンに劣らぬ堅固な要塞で固められていた。周囲の丘の上には砲台が築かれ、ビヤの騎兵攻撃を防ぐため、要所に機関銃基地が設置されていた。連邦軍高官は、これ等の戦略により、数で優るビヤの一万六千を迎え撃つには充分であると読んでいた。彼等はビヤが、先のチワワ市攻略の時には持たなかった砲兵隊を持っていることに殆ど留意していなかった。彼等はビヤが数ヶ月で砲兵隊を組織できるとは考えてもいなかった。93

重砲の威力に依存していた連邦軍にたいし、ビヤは夜襲戦術に出た。革命軍は戦闘の隙をみては抜け出して休憩した。一方の連邦軍は昼間砲撃に専念し、夜はビヤ軍の攻撃を受けた。包囲戦は凄惨を極めた。暗闇の中で革命軍は肉弾戦を展開した。連邦軍の弾薬が底を付き、戦闘員の士気も低下していった。ゴメス・パラシオが落ち、続いて四千人がトレオンから撤退した。連邦軍指揮官は諦めず、新しい六千の軍団をトレオンに程近いサン・ペドロ・デ・ラス・コロニアスに投入し、トレオンから逃げてくるベラスコの兵と共に、十日以上にわたる絶え間ない戦闘で疲れ切っている革命軍を撃とうと試みた。しかし、逃げてきたトレオン守備兵に影響を受けた兵士たちの士気は衰え、サン・ペドロ・デ・ラス・コロニアスは打ち破られ、連邦軍は更に南に撤退した。94

トレオンの勝利によりビヤの求心力は全国規模に広がった。ウエルタやカランサ以外の者を求めていたウイルソン大統領とウイリアム・ジェニングス・ブライアン國務長官の目には、ビヤはメキシコ革命の運命を左右できる指導者であると写った。ウエルタのクーデターから暫くして大統領に就任したウイルソンはマデロこそ民主主義と資本主義の実践者であると信じていたが、マデロ暗殺に愕然とし、ウエルタ政府を屠殺者政権と呼んだ。マデロ転覆を仕組んだメキシコ駐在米国大使ヘンリー・レーン・ウイルソンや経済界有力者からのウエルタ承認要請を大統領は悉く撥ね付けた。メキシコのエリートたちはアメリカの承認を得るため、選挙の開催を企画し、保守派の政治家であるフェデリコ・ガンボアを候補に立て、ウエルタは立候補しないことをウイルソンに伝えた。ウエルタには全くその気がなく、ウエルタに票を投じないとみられた国会議員を束にして留置所に投げ込んだ。英国の公使ライオネル・カルデン卿は米国に逆らってもウエルタを承認すると発表したため、ウエルタは勇気付けられた。その間に行われた選挙では大掛かりな選挙違反を行ってウエルタは大統領に選ばれた。95

選挙の日曜日10月26日、鷲谷精一はアメリカでの選挙の日を思い浮かべながら、様子を見に街へ出かけた。投票所を探し回ったが見当たらないので道行く人に尋ねたが誰も知らないという。その日が選挙の日であることも知らない様子であった。漸く出会った巡査はさすがに知っていて案内してくれた。普通の民家の門を入ったところに机が一つ置いてあり、四人ほどの男が煙草を吸いながら静かに話をしていた。暫く立って様子を見ていたが誰も投票に来なかった。つまらないので次の投票所へ行ったが、そこも同じような状況であった。四時間かけて五箇所を回ってみたが結局一人の投票者も見かけなかった。これで大統領が決まるのかと思い、この国家の前途に可憐の同情を禁じえなかった。⁹⁶

ウイルソン大統領はウエルタ転覆のためにあらゆる手段を尽くすことを決意した。ウイルソンは南進する憲政軍を支援するため、北部の主要都市および主要な港を米軍により押さえることをカランサに提案した。このような提案を受けるメキシコの政治家は、裏切り者の汚名を着せられる事は避けられなかった。当然カランサはナショナリズムを鮮明にして、これを拒否した。⁹⁷

90. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P290

91. Ibid. P291

92. Ibid. P304

93. Ibid. P306

94. Ibid. P307

95. Ibid. P310

96. 日米新聞、Nov. 12 and 13, 1913

97. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P310